

## 博士論文審査及び最終試験の結果

蕭幸君氏の博士論文『昭和期における谷崎文学の創作方法』は、昨年9月に提出され、沓掛良彦（主査）、国松昭（副査）、柴田勝二（同）、村尾誠一（同）、西永良成（同）の五人の委員がその審査にあたった。委員全員は2か月をかけて提出された論文を熟読した上で、11月8日に審査委員会を開催し、各委員が蕭氏の論文について詳しく講評し、意見交換をおこなった上で、慎重に論文の審査と合否判定をおこなった。提出された同論文が谷崎研究において新たな視野を切り開いているかどうか、どういうところに創見があり、谷崎研究に貢献するところがあるか、などという問題をめぐって議論がなされた。日本近代文学の専門家、谷崎文学にも詳しい柴田委員、国松委員によって、専門の立場から、蕭氏の論文に見られる幾つかの構成上の弱点や疑問とされる点が指摘され、また村尾委員からも、昭和期の谷崎文学を考える上で、取り上げなくてはならない作品の扱い方に欠落があることが指摘された。しかし全体として見た場合には、確かに幾つかの難点、弱点はあるものの、昭和期の谷崎の作品の構造や文体に視点を据えて、代表作七つを綿密に読み込んで分析し、その創作手法を明らかにすることによって、この時期の谷崎文学の特質を明らかにし得たという点では、この労作は、本学の博士論文としては十分に合格に値するものと判定された。この点に関しては審査委員全員の意見は一致し、論文は合格とされた。蕭氏の論文は、昭和期の谷崎文学を総合的に（構造、人物造形、文体等の観点から）、論じ、谷崎の創作方法を明らかにしていることに成功している論文として、きわめて優れたものだとの国松委員の高い評価があった。蕭氏は先学諸家による参考文献を博搜し、それらを正確に読みこなし、よく消化した上で、取るべきは取り、批判すべき点は見逃すことなく研究に生かしている点も、学術論文としては順当な手続きを踏んだものと言えよう。

また留学生である蕭氏が、外国語である日本語を自在に駆使し、これだけの内容のある論文を執筆し得たその力量に対して、全員が敬意を表した。

公示1か月の後、最終試験（口述）がおこなわれ、11月の審査委員会で問題とされた点をめぐって、各委員から蕭氏に質問がなされ、蕭氏の応答がなされ2時間に及ぶ白熱したやりとりがなされた。

蕭氏は、これまでの谷崎研究は、作家論、作品論、テーマ研究、方法論という流れに沿って進められたり、作品の物語性の形態や構造に着目した研究が主流であって、創作手法の全体像を明らかにしようとするものが見当たらない、と主張する。谷崎の作品は、作品構造の「完全なる組み立て」にこだわって創作されたものであるがゆえに、これまでの谷崎研究の多くに見られるように、一つのテーマ、一つの方法だけを取り上げて分析をおこなうのでは、作品の内部構造の全体像が見えてこない。そのため、一つの作品に用いられた複数の創作手法がどのような形で関わり合い、その相互関係が作品の創造にどのような影響を与えているかということ、ぜひとも解明する必要がある、という問題設定がなされている。

提出された論文は、このような問題設定の上に立って、円熟期を迎えた昭和期の谷崎文学を対象にして、その創作手法の特質全体を明らかにしようという野心作である。論者は「昭和期の谷崎文学はことごとく共通した複数の手法を組み立てて創りだされたものだ」との観点に立って、昭和期における文壇の動きと読者層の変化という外的要素も視野に入れつつ、この時期における谷崎の創作手法の変遷を追い、これを詳細に分析し、円熟を迎えた昭和期の谷崎の小説群がどのような手法によって生み出されたか、それを明らかにしようとしている。

本論文は全五章から構成されている。

序章は昭和期における谷崎文学の俯瞰である。第一章では谷崎文学が後期作品においてどのような変貌を遂げたかが考察されている。第二章では昭和期の谷崎文学における人物像の多様化の問題が論じられている。第三章では、文体、語り、ストーリー、ジャンルなどの側面における多様性が考察され、その多様性が作品の構成にどのように機能しているかということが詳細に論じられている。第四章は結論にあたる部分であるが、ここでは作品の内部構造を論じた上に、外在的要素についての付加的言及がなされている。すなわち、昭和期の谷崎が、その創作手法とし私小説と大衆小説を取り入れ、それによって作品の多様化という現象が生じたことが指摘されている。

蕭氏の論文において分析の対象として取り上げられたのは、昭和期における代表的作品である「卍」「吉野葛」「蘆刈」「春琴抄」「少将滋幹の母」「鍵」「夢の浮き橋」の七作品であるが、最大の作品である『細雪』は全く触れられていない。上述のごとく、論者はそれらの作品群に見られる「多様性」「多重構造」に着目し、創作上の手法の多彩さに光を当てて、これをこの時期における谷崎文学の豊饒さを裏付けるものと見なし、論を進めている。

蕭氏は、氏が谷崎文学の前期作品と後期作品の分岐点とみなしている『饒舌録』（芥川との論争、いわゆる「小説の筋」論争を展開したエッセイ）の中の、「凡そ文学に於ては構造上の美観を最も多量に持ち得るものは小説である」という言葉をとらえ、円熟期である昭和期の谷崎文学は、作者がそれを実践したものだと言っている。

この時期の谷崎文学は、文体、語り、人物像、ストーリー、ジャンル、文学路線といったあらゆる創作の側面に多様性を持たせたものである。物語の中に物語（論者の言う「素材物語」）を持ち込む、作品における「物語の共存」や、異質の文体を織り交ぜる多種多様な文体の使用、人物像の臃化、「謎」の導入などによって、作品の読みの多様化の可能性を増大させ、そのポリフォニックな構造が、作品の内容をより豊かなものとしていることが説かれている。その考察は、取り上げられた七つの作品ことにも「春琴抄」「蘆刈」「夢の浮き橋」の綿密、微細な読みと分析によっておこなわれており、力強い主張がなされている。論者は結論部において、「そもそも錯綜体である小説の構造をあらゆる創作の側面を多様化して創り出された谷崎の後期作品は、なんらかの主題を見出して読むこともでき、そこに作家の実生活の痕跡を見つけることもでき、あるいは、スリルやミステリーを満喫することもできるばかりでなく、創作的な面から見ても、かなりの収穫が得られるはずである」と論じ、作品の内部において文体、語り、人物像、ジャンルなどを多様化し、創作の方向を多様化するという貧欲なほどの豊饒性が、昭和期の谷崎文学に無限な読みの可能性をもたらしている、との結論を得ている。この時期の谷崎の小説に見られる「多重構造」により作品が求心力を失い、分裂してしまうのを「吸収」してゆく要素として、作品に「謎」を設けたという論者の指摘は興味深く、一般論的ではない小説の「謎」の問題を、谷崎がこの頃創作に取り入れていた推理小説、大衆文学の手法と結び付けてゆくのは、文学史的な定位の上でも説得的な視点だとして、村尾委員はこれを評価した。

柴田委員によって批判され、他の審査委員も同感であったのは、こういう作品の多義性、複線的な筋の存在、論者の言う「物語の共存」という現象、手法はなにも昭和期の谷崎文学固有のものではなく、そこにのみ谷崎の文学の特質を求めるという論法にはやや無理があるという点である。蕭氏はこの論文において、谷崎の各作品読解の多様な可能性を提示しているが、柴田委員が批判したように、解釈の多様性を示すだけでは、論者の独自の主張とはなり得ないのであって、その点においては本論文は再考の余地を残している。また論者が、昭和期の谷崎

文学の世界を豊饒なものとしている要素として重視している、作品の「多重構造」、語りの多様性といったものが、必ずしもある小説が傑作であることを保証するものではないことにも、留意する必要があるとの意見も出た。

また、作品解説に際して「語り」の問題が重視されているが、語りの手法の考察は十分ではなく、ことに他の作家の語りとの比較が全くなされていないため、どこまでが物語文学の普遍的な特質であり、どこからが谷崎文学の特質であるか、そのあたりが十分に明確にされてはいないとの批判もなされ、この点を補強すれば論文はより説得力が増すであろうとの助言が与えられた。また論者はこの論文において谷崎の「文体」の問題を重視し、作品の多様性を助長する要素としてこれを論じているが、その「文体」の定義がやや曖昧であり、作品の中に用いられる手紙、日記、記録文書の導入などを、果たして谷崎の「文体」としてとらえてよいものかどうかとの疑問も提された。これに対して論者から、本論文においては、「文体」という概念を、作家谷崎が作品の中で用いている種々の叙述のスタイルの意味でとらえているのだ、との説明がなされた。さらには作品分析において、「創られた盲点」「主題の遁走」といった問題設定がなされているが、こういう問題設定に見られるように、総じて自分自身で設けた観念や枠に囚われ過ぎているため、自縄自縛に陥っている観があるのは惜しまれる。学術論文であることを意識しすぎたため、客観的、実証的たろうとして、蕭氏の特長である鋭い批評眼と切れのよい文体が十分に活かしきれていない憾みがあるとの意見が、西永委員及び沓掛委員から出た。

またこの論文の起点となっているのは、芥川との間に交わされた小説の「筋論争」であり、論者はこれをきわめて重く見ているが、論を進めるにあたっては谷崎の主張のみが扱われ、芥川の主張にはあまり触れられていない。もっと芥川の側に立っての考察があれば、論文全体がより説得力を増すものと思われる。

さらには、昭和期の谷崎文学の創作方法を扱いながら、この時期における最大の作品である『細雪』に全く触れられていないのは、本論文における最大の欠落であることが村尾委員、柴田委員、国松委員によって指摘された。この論文で『細雪』が扱われていないのは、この作品を昭和期の傑作と見なさないためかという疑問に対して、論者はこの小説があまりに大きな作品であるため、後日独立した論考の対象とする予定なので、敢えて本論文では取り上げなかったとの主張がなされた。『細雪』が扱われていないことへの批判に対しては、確かにそれは大きな欠落ではあるが、扱われた七つの作品の精細な分析を通じてだけでも、本論文は昭和期の谷崎文学の創作手法の特質を浮かび上がらせることに十分成功しているから、その点を積極的に評価すべきだとの擁護論が出た。

上記のごとく、本論文は確かに幾つかの問題点を残してはいるが、これを総合的に評価すると、昭和期における谷崎文学の創作手法全体に光をあて、その豊饒さのよってくるところを解明した意義は大きいと評価し得る。この時期の谷崎文学の作品の豊饒さを意識的な「多重構造」を用いた作品構築にあると見て、昭和期の七作品の綿密、犀理なテキストの読みと分析を通じて、作品の特質を浮かび上がらせ、創作手法の特質を明らかにしたのは論者の大きな功績と言い得る。昭和期の谷崎文学全体をとらえ、作者が「素材物語」を導入した「物語の共存」という手法、多様な文体といったものを意識的に駆使して、この時期に多くの読者を獲得した円熟期の傑作を生み出したのだという論旨は、筋が通っており、きわめて魅力的である。

従来谷崎文学は伝記的研究、作家論、個々の作品論、テーマ研究という分野で進められてきたが、円熟期の谷崎の作品群を横断的に扱い、その創作上の手法を綿密に分析して、作家谷崎の創作手法の全体像を究明しようとした果敢な労作として、本論文は谷崎研究に一石を投じており、その分野において確実な貢献をなすものと思われる。さらには、日本語を母語としない

外国人であるとは信じがたいほどの、みごとな文体を駆使し、600枚を超えるこの大作を執筆し得た論者の能力と、作品解説に見られるこまやかな感性と鋭い批評眼も、蕭氏の文学研究者としてのすぐれた資質を感じさせ、その将来性を約束するものとして、審査委員一同の称賛を得たことを言い添えておかねばならない。

以上の点にかんがみ、本論文は、本学の課程博士として、蕭幸君氏に学術博士の学位を授与するには十分な水準にあるものと、審査委員一同は判断する次第である。